ハルケギニアで溜息

鉛筆削り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハルケギニアで溜息

【Ｎコード】
Ｎ４３６１Ｓ

【作者名】
鉛筆削り

【あらすじ】
おぼろげな原作知識を持つ主人公が物語に介入するお話です。

プロローグ

僕が生まれたのは、平和な時代だった。

トリステインはもちろん、アルビオンもガリアもロマリアも成り上がりと罵られているゲルマニアも大規模な戦争をしていない時代だ。

もちろん国境付近で小規模な諍いはあっただろうし領地も必ずしも平和とは言い難かったけれど、国と国が戦いを起こすようなことは全くなかった。

少なくともトリステインの内部の僕の家が収めている領地は十分に平和を謳歌していた。

そんな時代に、僕は生まれた。

僕はこの世で生を賜ったとき、他の一般的な赤ん坊と同じように泣きわめいた。

僕は極めて平均的で常識的で普遍的な赤ん坊だったのだ。

でも僕は、他人には明かすことのできないちょっとした秘密をもっている。

そのことは、両親にも話したことはない。

そしてきっとこれからも、誰にも話すことはないだろう。

僕は僕の抱える秘密を、墓場までもっていくつもりだ。

考えてみても欲しい。

前世の記憶があるだなんて、誰に打ち明けることができるだろうか。

あんまり変なことを言うと、ロマリアの神官たちがやってきて異端審問にかけられてしまうかもしれない。

ただでさえ、僕の生まれた家はあらゆる意味で平均的な貴族の家だったのだ。

僕が彼らにその話をすることは、まずあり得ないことであると言えた。

父親はトリステインに仕える伝統的な中堅の貴族であり、母親も普通の貴族だった。

でも父親と母親はトリステインの誇る伝統的で古くさい習慣に倣って政略結婚をするようなことはなかった。

いや、その必要がなかった。

大して富みも名声も権力も才能も持たない父親と母親に対して、彼らの両親たちは特別な期待を寄せることなく、自分の子供が身の丈にあった結婚相手を選んできたことを共に喜びあった。

もちろん、祖父たちが立身出世を夢見なかったわけではないだろう。

しかし彼らは自分たちの身の程というものをよく知っていた。

それは、彼らの持つ最も尊い美徳だった。

そこそこの貴族に恋愛をすることは下手な極貧貴族や平民に対して恋心を抱くよりも遥かにまともであり、彼らはそのことに胸を撫で下ろしたのだった。

僕は、そんな家で育った。

彼らは僕に一般的な貴族の考え方を教え、一般的な貴族の礼儀や作法をしつけ、一般的な貴族の能力を要求した。

僕はそれに忠実にこたえ、彼らにとって喜ばしい子供を演じてきた。

両親は、僕が腹の中で別のことを考えているということに、気がつかなかった。

もしかしたら怪しんでいた部分はあったかもしれない。

でも、僕がどういう存在であるかを理解することはできなかったはずだ。

だってそうだろう。

自分たちの子供が別の世界から??ハルケギニア大陸のある世界をライトノベルやアニメの中の存在として理解していた世界から??その知識を引き継いだまま生まれてきたなんて、誰が想像できるというのだろうか。

かくして僕は成長し、１５歳になった。

そして魔法学院での生活が始まる。

僕は、この世界のことはアニメでちょっとみてみた程度の知識しかなかったから、将来起こることを予期して前もって行動をしたり、予言者めいた発言をしたりすることはできない。

僕の知識はすり切れてぼろぼろになった遥か昔の宝の地図のようなものであり、そこに書いてある字はかすれて読めなくなっていた。

それでも、

魔法学院　ルイズ　サイト　虚無

これらの単語が重要な意味を持つことを、僕は覚えている。

ミスヴァリエールが僕と同時に入学を果たす。

そしてそこから、物語は始まる……はずだ。

僕はこれからのことを考えて、わくわくしていた。

魔法を目の当たりにした時と同じくらいに興奮しているかもしれない。

ここから、普通じゃない、特別な何かがはじまるんだ。

僕ははやる気持ちを抑えながら、馬車の中で魔法学院での生活をあれこれと考えた。

??魔法学院まで、あと少し

はじめまして。

初投稿です。

何となく書いてしまいました。

気ままに更新していきたいと思います。

入学式　その１

僕たち新入生が通された大講堂は、とても広くて豪華な作りだった。

大講堂全体は伝統を感じさせるカビ臭い匂いを漂わせ、頭上に陳列するシャンデリアは精神的な圧迫感を感じさせた。

壁にはいかにも偉そうな人が描いたような偉そうな絵がかけられている。

すごいな、と僕は素直にそう思った。

僕の家は決して裕福といえるような財産を持ってはいなかったから、ここまで荘厳な建物の中に入ってその内装を見てみる機会はほとんどなかったのだ。

もともと前世でも慎ましい生活を送っていたということもあってか、僕にとっては豪華なこの建物が、とても威圧的で荒々しくて、ちっぽけな僕という存在を押しつぶそうとしているかのように感じられた。

それは、これから行われる入学式への緊張からもたらされたものでもあるのかもしれない。

とにかく、僕はまわりの様子にすっかり目を奪われてしまっていたのだ。

だからだろうか。

僕はちょっと注意力が散漫になっていたようだ。

前を歩いていたきれいな赤い髪を腰まで伸ばした女の子にぶつかってしまった。

女の子はちょっとビックリしたように振り返り、僕を視界に収めるとまじまじと見つめてきた。

僕は慌てて謝った。

「失礼。少々考えごとをしていてぶつかってしまったようだ。他意はない」

「あら、気にしていないから大丈夫よ。でも、その言い方だと逆に他意があるみたいね」

と彼女は冗談めかして言った。

確かにその通りだ。

僕がそのことを謝ると、彼女は朗らかに笑い出した。

「あなた、謝ってばかりね。ねえ、学園長が挨拶を始めるまで時間があるみたい。ちょっとお話しましょう？」

僕と彼女は前から詰めて隣同士に座り、そこで改めて自己紹介をした。

「私、キュルケよ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・

アンハルツ・ツェルプストー。お隣のゲルマニアから来たの」

と彼女は言った。

「ゲルマニアから？　どうしてわざわざトリステインにまで？」

と僕は訊いてみた。

「前の学校でちょっとやらかしちゃってね。それに変な婚約を結ばされそうになったから、逃げてきちゃったの。だって私、まだまだ１８歳なのよ？　女は恋をして磨かれていくっていうのに、どうしていきなり人生の墓場に片足を突っ込まなくちゃいけないのよ。しかも相手はいい歳したお爺さまよ。信じられる？」

彼女？？キュルケ？？は喋りながらヒートアップしてきたようで、その胸にたわわに実ったけしからん脂肪のかたまりを揺らしながら、僕のすぐ側まで顔を寄せてきた。

話には関係のないことだが、彼女の格好はすごく扇情的だ。

ブラウスは上３つのボタンを外していて、胸を大きく露出させている。

スカートもこれは、膝上何センチなんだろう……？

奇麗で長い足を、これでもかというくらいにアピールしている。

もしも彼女が前世？？もちろん僕にとっての前世という意味だ？？の街を歩いていていつもこんなスカートを履いていたら、階段やエスカレーターの下から覗き込む健全な青少年が増える要因になっ

たに違いない。

それほどに彼女は美しかった。

清楚な美しさではないが、エロティックな美しさがある。

トリステインでは下品だといって非難されるかもしれないが、彼女は確かに美しさというものの一端をその身に宿しているようだった。

そんな彼女が急接近してきて、僕はたまらずのけぞってしまった。

そして今度は、右隣にいた女の子??ミスツェルプストーは僕の左隣に座っていた??にぶつかってしまった。

正確にいうと、女の子の持っていた本に体を当ててしまったのだった。

バサッ、という音を立てて分厚い本が床に落ちた。

僕はまた、慌てて謝るはめになった。

僕は何かの辞書だと言われてもそう勘違いしてしまいそうなほどに重くて文字のぎっしり詰まった本を拾い上げて、小さな女の子に謝罪の言葉を述べた。

今度はミスツェルプストーのときとは違って、笑われたりはしなかった。

しかし、うまくコミュニケーションが取れたかどうかもよく分か

らなかった。

小さな女の子は蚊が鳴くようなほんの小さな声で「いい」と言っただけだった。

僕はそれに幾分困惑しながらも、手に持った本を手渡そうとした。

でも、それは第三者の手によって遮られた。

入学式　その１（後書き）

中途半端なところで区切ってしまって申し訳ありません。

でもとりあえずこんなもので。

いきなり頑張って書き出すとそのうち息切れしそうなんで、しばらくはこんな調子でいこうかなと考えています。

異論は受け付けます。

入学式　その2

小さな女の子に渡そうとした本を取り上げたのは、ミスツェルプストーだった。

彼女は広辞苑ほどの重さを有した辞書的な本をしげしげと観察して、驚いたように口を開いた。

「これ、かなり難しい本じゃない。私だってよく分かんないわよ」

しかし小さな女の子はミスツェルプストーの言うことに興味がないらしい。

音もなく手を伸ばして、

「返して」

と言った。

またとても小さな声だったが、今回の声には意思というものがちゃんと感じられた。

もしかしたら、この本はこの子にとって非常に大事なものなのかもしれない。

ここでミスツェルプストーが素直に本を返していたら話は簡単だっただろう。

でも彼女はそうしなかった。

からかうような笑みを浮かべて、挑発的な言葉を投げかけたのだった。

「こんな難しい内容があなたに分かるのかしら？　高尚そうな本を読んで頭良さそうに見せるなんて、今時はやらないわよ」

「返して」

「よく聞くと発音がトリステインとちょっと違うみたいね。もしかしてガリア出身かしら。私はゲルマニアの出身よ。故郷は違うけど、異郷の者同士仲良くやりましょう」

「返して」

「トリステインてどうも堅苦しくて苦手なのよね。もっと自由に開放的にやるべきだと思わない？　古くさい格式なんかにいつまでも拘っていたら、そのうち身動きが取れなくなって『慮る人』みたいにかちんこちんに固まっちゃうわ。ねえそうでしょ？」

「返して」

「私はキュルケよ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーていうの。あなたの名前は何て言うのかしら？」

「……返して」

二人の会話は面白いくらいに成立していなかった。

ミスツェルプストーは小さな女の子のことはおかまいなしに質問を浴びせたり訊かれてもいない自分のことを話したりしている。

一方で、小さな女の子はただ「返して」と繰り返すばかりだ。

僕はそんな二人に挟まれながら、やれやれと溜息をついた。

どうにも埒があかない。

このまま二人を会話させていたらそれだけで時間が無駄に過ぎ去ってしまいそうだし、もしもどちらかが怒り始めたら目も当てられない。

ミスツェルプストーの声は徐々に苛立ちを含んだものになりつつあるし、小さな女の子も考えていることは読み取りにくいとはいえ、大事な本を取り上げられて愉快なはずがなかった。

僕はとりあえず、ミスツェルプストーのほうをどうにかすることにした。

身を乗り出して小さな女の子に話しかけていたミスツェルプストーの視線を遮るようにして手を振ると、彼女はようやく僕の存在を思い出したようだった。

「ミスツェルプストー、とりあえずその本を返してあげよう。どうやらこの子は本のことが気になるみたいで僕たちと話をする余裕がないみたいだ」

と僕は言った。

するとミスツェルプストーは拗ねたような表情になって、

「だってこの子、ずっと私を無視するのよ。失礼じゃない？　それに本を返したら、ますます会話してくれなくなるわよ」

と言った。

なるほど、確かに一理ある。

本を返さないミスツェルプストーも悪いことは悪いが、まともに話もしてくれないとなると、意固地になってしまうのも分かる。

本を返してしまったら読みふけてしまうであろうこともまた想像に易く、それでは腹の虫が収まらないのだろう。

どうしたらミスツェルプストーを説得することができるだろうかと数瞬悩み、とにかくネゴシエイトを続行せんと口を開きかけたときに、思わぬところから横やりが入れられた。

入学式　その２（後書き）

また中途半端に切ります。

すみません。

お話も進んでませんね。

さすがに入学式は次のお話で片付くはずです。

入学式　その3

横やりを入れた人物は僕たちのちょうど前の席に座っていた。

それが援護の声であったらどれだけ嬉しかったことだろう。

しかしながらそれは天使の応援ではなく、悪魔の妨害だった。

「あんた、さっきからうるさいわよ！　人の本を奪って好き勝手言って。さっさと返してあげなさいよ。これだからゲルマニア女は野蛮だってバカにされるのよ。服装も乱れているし、ゲルマニアには慎みという概念がないのかしら。それに、さっきトリステインのことを侮辱したでしょう！？　堅苦しいですって？　何の規律も制限もないから、あんたみたいな恥知らずな女が出てくるのよ！」

唖然とした。

悪口雑言罵詈誹謗が出てくるわ出てくるわ……。

それも、ミスツェルプストーを口汚く罵ったのは醜い女の子なんかではない。

むしろ外見は、まるで天使のそれだった。

桃色の髪は触らなくてもさらさらなのが分かったし、真っ白で健康的な肌もきっとすべすべしていて、なでることができたらさぞ気持ちがいいことだろう。

しかし何より特徴的なのはつり上がった目で、そのせいで彼女の

印象を強く攻撃的なものに感じさせていた。

僕は彼女を見て、頭を強く叩かれたような衝撃に襲われた。

実際に叩かれたわけではない。

でも、彼女の姿はそれくらいの質量をもって僕の頭の中に強烈に入り込んできた。

そして、うっすらとぼやけていた僕の記憶のひとかけらを明るく照らし出した。

……間違いない。

彼女こそが、『ルイズ』だ。

この世界を舞台にしたお話の、ヒロインだ。

僕は遥か昔の記憶がフラッシュバックする感動に打たれて、またルイズの美しさに見とれて、少しだけ呆然としてしまった。

しかし呆然としていたのは僕だけではなかった。

突然の美しい闖入者がよく響く大きな声で汚い罵倒をしたことで会場は静まり返り、建物の中にいる人たちの視線と関心は事態の中心に集められることとなっていた。

つまりみんな??僕とはちょっと違った理由ではあるけれど??呆然としていたのだ。

そんな中で、ルイズだけが目を怒らしてミスツェルプストーを睨んでいる。

いち早く再起動を果たしたのは、中心的人物の一人であるミスツェルプストーだった。

彼女はルイズを小馬鹿にするように鼻で笑うと悠然と椅子から立ち上がり、本の女の子に向けていたのとは種類の違う挑発的な表情を作って、

「あら、どなたかと思ったらミスヴァリエールじゃない。ごめんなさいね、あまりに小さいから気付かなかったわ。小さいといえばミスヴァリエールは体のとある一部分が特に貧相ですわね。私のこの服装は乱れているのではなくてこういうファッションなのだけれど、あなたのような体つきではあまり似合いそうもありませんわね」

と言った。

その言葉に、ルイズの顔が真っ赤に上気した。

恥ずかしがっているわけではない。

とんでもなく怒りを感じていることが見ているだけでもよく分かった。

あまりに激しく沸き立つ怒りを抑え切ることができないのか、小さな体をぷるぷると震わせながら「な、な、な……」と言葉を詰まらせていた。

そこに、ミスツェルプストーが最後の爆弾を投下した。

「そんなんだから、ヴァリエール家の女性たちは殿方に逃げられてしまうのではなくて？　恋人に逃げられるだなんて、よっぽど品のない生活を送っていたのかしら」

彼女のピンポイント爆撃は正確にルイズの堪忍袋と逆鱗への直撃を成功させ、既に振り切れていた怒りゲージのメーターを木っ端みじんに吹き飛ばしたようだった。

「あ、あああんた、ななななんてことをいってくれるのかしら……。バカな男たちが去っていくのは、破廉恥で厚顔無恥なあんたたちがいやらしい誘惑をかけて奪っていくからでしょうが……！　なんて節操がないのかしら……！」

僕はそんなルイズの様子を見て、思わずぽつりとつぶやいた。

「せっかく可愛いのに、まるでオーク鬼のような凄まじい形相だ……。親の敵を見ているようだな」

あまり大きな声ではなかったからその言葉を聞いていた人はあまりいなかったが、反応は意外なところからかえってきた。

「今の話によると、実際に親の敵のようなもの」

さりげないツッコミは右隣の本の女の子のものだった。

彼女はミスツェルプストーとルイズが口論を始めたときにでも回収したのか、いつの間にか重量感のある本を取り戻しているようだ

った。

「それもそうだね」

と僕はうなずいた。

今まで話しかけても「返して」しか言わなかった彼女がどうして反応したのかはよく分からなかったが、会話を切り出すきっかけを得たことは確かだった。

しかし僕が彼女に話しかけることはできなかった。

折悪しく??いやミスツェルプストーとルイズのことを考えるといいタイミングだったのかもしれない??学院長が姿を現したからだ。

ミスツェルプストーもルイズもさすがに学院長が出てきたことで引き下がることを決めたらしい。

ミスツェルプストーはあくまでも余裕綽々に席に座り、ルイズも射殺さんと危険な色に染めた目はそのままにしながらもいちおう席に着いた。

学院長の長々とした話を右から左へ聞き流しながら、僕は両隣の女の子たちのことを考えた。

僕の記憶によると、彼女たちも何らかの形で『物語』に関わっていたように思う。

それに二人ともとても風変わりで面白そうな為人をしている。

もしかしたら、きょうこの席に座れたのはラッキーなことであるのかもしれなかった。

これからこの学院で起こる出来事について僕が覚えていることはほとんどないけれど、それでも退屈だけはしないはずだ。

そう思って、僕は少しだけ笑った。

入学式　その３（後書き）

ようやく入学式が終わりました。

しばらく学院生活を描くか使い魔召還までキングクリムゾンするべきか。

気が向いたほうでやっていこうと思います。

せっかくだから学院生活をやってみようかな。

学院での生活

僕の朝は早い。

まだ誰もが寝ているような時間、日が出る頃には目を覚ましている。

これには二つの理由がある。

一つは、この世界に娯楽が少ないことが挙げられる。

前世では本やゲームやパソコンなどなど、数えきれないくらいの時間の過ごし方があった。

しかしこの世界で夜更かしをしてまで楽しめるような娯楽はほとんどない。

たまに本を読んでいて遅くまで起きてしまうこともあるけれど、僕は寝床についたらすぐに眠くなってしまうタイプなので、そのようなことも非常に稀だった。

朝まで語り合ったり遊んだりする友人もいるわけではないから、夜はやることがなくなってしまうのだ。

もう一つの理由は、僕が前世の頃から早起きをモットーにしていたということだ。

早起きは動物としての正常な生活リズムの象徴であり、夜更かしをしてしまうことに比べて遥かに体にいい。

何の本かは忘れてしまったが、「朝の学習は夜の学習に比べて２０倍の効果がある」というような記述を目にしたこともある。

その比較が正しいものであるかどうかは僕には分からなかったが、それは早起きというものがいかに効率的なものであるかということを僕に強く印象づけてくれた。

だから僕は可能な限り早くに眠り、可能な限り早くに起きることを心がけているのだった。

もはや魂にまで染み付いた習慣と言えるのかもしれない。

今日も今日とて、僕はいつも通りに目を覚ました。

僕は起きたらまずは顔を洗う。

そこである程度意識を覚醒させたら次には柔軟体操を始める。

頭をフルに使う為には、脳はもちろん全身の筋肉に新鮮な酸素を行き渡らせることが必要不可欠だ。

ゆっくりと深く腹式呼吸を行いながら、筋肉繊維の一つ一つを確かめるようにじわじわと伸ばしていく。

足首から首までの柔軟体操を終えた頃には、もうすっかり目は覚めていた。

それから僕は寝間着から動きやすい服装に着替えて３０分ほどランニングをこなし、人気のない木々にまぎれて魔法の練習を始めた。

トリステイン魔法学院は魔法学院と言いながらも魔法の実習はそう多くはない。

ほとんどが座学と簡単なコモンマジックの練習に終始する。

僕たちがまだ入学してから間もない１年生で、しかも多くの生徒がドットであることを考えれば仕方のないことかもしれない。

しかし既に知っていることやできることを長々と教えられたり眺めていたりするだけではあまりに退屈だし、何より腕が鈍ってしまう。

だから僕は授業の時間は読書か友人たちとのおしゃべりに当てることに決めて、魔法の練習は自主訓練することにしたのだ。

とはいえやることはそう多くはない。

基本的には自分の使える魔法をおさらいして確認するだけで、今の自分に扱えるよりも上級の魔法を試したり精神力が切れそうになるまで魔法を使うようなことは基本的にしない。

こういうのは地道な作業の継続が大事なのである。

今日も一通りの魔法をおさらいして調子が悪くないことを確認して自室へと戻った。

これくらいの時間になると、起き出している人も多い。

もうしばらくすると朝食の時間となるのだ。

僕は全身にかいた汗をぬれたタオルで拭い??本当はシャワーを浴びたいところだがそんな気のきいたものはない??魔法学院の制服に着替えた。

するとタイミング良く、キュルケがドアを開け放って部屋に入ってきた。

「……キュルケ、アンロックを使っておもむろにドアを開けるのはよしてくれ。ノックをしてくれれば普通に開けるといつも言っているじゃないか」

「どうせ開けるのなら関係ないじゃない。あなたの手間を省いてあげたのよ。それとも、何か見られたくないものでもあったのかしら？」

とキュルケはからかうようにして言った。

彼女は今日も絶好調だ。

「いや、別に見られて困るものがあるわけではない」

「ならいいじゃない。それよりも、さっさと食堂にいきましょう。朝食の時間よ」

「そういう問題ではないと思うんだけど……」

キュルケは部屋を開けるときにはいつもアンロックを使う。

そのことに関して僕は何度となく苦言を呈しているのだが、その努力が報われたことは一度もなかった。

もはや僕もほとんど諦めてしまっており、それでも文句をたれるのは僕のささやかな抵抗のあらわれだった。

僕とキュルケは食堂へ移動する間や食事の時間にもいろいろと話をする。

とはいえ僕はあまり話をするのが得意ではなくキュルケは話をするのが大好きだから、話しているのはほとんど彼女の方で、僕は相づちを打つのがもっぱらの仕事だった。

「でね、昨日はギムリとあつーい夜を過ごしたのよ。ペリッソンもいいんだけど、彼のように力強くて包容力のある殿方も魅力的なものね」

「ふうん」

しかし、食事の時間に？？むしろ食事の時間でなくてもだけれど？？下ネタすれすれのきわどい恋愛話をするのはよしてほしい。

そんな話を僕にふって、一体どんなリアクションを期待しているというのだろうか。

「あら、気のない返事ねえ。もしかして嫉妬しちゃった？」

「……いいや、別に」

「若いってのに枯れちゃってやあね。そんなんじゃ、青春を謳歌することはできないわよ。せっかくの学院生活なんだから、満喫しなくちゃ損じゃない」

僕はキュルケとは違った方向??主に魔法の学習や友人の獲得??などで学院生活を満喫しているし、どんなに容姿に優れてみんなに人気があってもキュルケのように異性を漁るような楽しみ方だけはしないだろうということだけは確信できた。

そのことに関しては、僕とキュルケの意見は平行線なのだった。

その後も散々キュルケの話に付き合わされて気がつけば授業の時間となり、授業の合間に勃発したキュルケとミスヴァリエールの喧嘩を傍観したりタバサ??入学式で僕の隣に座っていた青い髪の女の子だ??と手持ちの本を貸しあったり何人かの友人に魔法について質問されたことに答えたりしながら一日を過ごした。

ところで、入学式で僕の隣に座っていたタバサだが、あれから話しかけてもあまり芳しい反応を得ることはできなかった。

それでも彼女は見るからに本の虫で、僕も読書は好きだったから彼女との間に接点を見つけるのはフライの魔法を唱えることよりも簡単なことだった。

僕は自分がもっている中でも一番分厚くて重くて難しい本を彼女のところに持っていって読ませ、その代わりに僕もタバサの本を読

ませてもらうことになった。

僕の読む本は彼女の読む本に比べて若干レベルが低いと言わざるを得なかったが、それでもタバサは読んだことのない本ならその全てに興味を示し読みたがってくれた。

僕としても難しい本をわざわざ読むいいきっかけ作りになったので、頭を悩ませながらも毎日彼女から借りた本にも目を通している。

未だにタバサとの会話はほとんどないしセリフがいつも原稿用紙の一行を超えないような状態だけど、こうした小さなコミュニケーションの積み重ねが、いずれ大きなものへと成長していく……といいなと思っている。

あまりぶっとんだことが起こるわけでもない平和な日常だったが、僕はこういう時間がきらいではなかった。

これが、僕の学院での生活だ。

学院での生活（後書き）

なんかグダってますね。

もうちょっと頑張ります。

キュルケとタバサ　その1

女子は群れる動物だ。

女三人寄ればかしましいなんて言葉があるくらいだから、女子の間でのおしゃべりには凄まじいものがある。

話題になるのは気になる異性の話だったりスタイルの話だったり授業の話だったり料理の話だったり裁縫の話だったりと、だいたいが実もなければ害もないような無難なものである。

だが、もちろん例外だって存在する。

女子だって人の子であり、気に食わない他人の愚痴を交わしたり文句を言ったり場合によっては悪口をささやくことだってある。

僕はそんな女子のドロドロとした腹黒い会話を小耳にはさんでしまって、少し気分を害していた。

しかもやり玉にあげられているのが自分の友達ともなれば尚更だ。

陰口を叩かれていたのは、キュルケだった。

キュルケは男子からの人気は高いが、女子からの人気は低い。

やっぱりというべきか、当たり前と言うべきか。

キュルケはものすごいスタイルを持っている魅力的な女性で、男たちに積極的なアプローチをかける。

見た目が優れていて男慣れしており魔法の腕も高いのだから、声をかけられた男たちはたまらずに飛びついてべた惚れしてしまうのだ。

一方で、そうやって格好いい男たちが奪われていくのを目の当たりにした女子たちは、キュルケを目の敵にするわけである。

キュルケは明け透けな性格をしていてあまりトリステインの貴族の雰囲気には合わないから、そういった部分を攻撃する女の子も多かった。

ゲルマニア出身ということも、それに輪をかけているのかもしれない。

いずれにしても、それは僕にとってあまり嬉しくないことだった。

女の子はみんなキュルケのことを体で男を魅了する淫売のように表現して侮辱するけれど、僕はそんなキュルケがきらいではなかった。

少なくともキュルケは嫉妬をしてコソコソと陰に隠れて他人を貶めるような女の子ではなかった。

玉に瑕なのは、人の彼氏を奪ってしまうことだったが……。

僕は今日の最後の授業が終わってから自室に戻る間にキュルケの悪口をきいてしまったのだった。

それで僕は少し不機嫌になってしまい、部屋にいても読書がなかなか進まなかった。

部屋で勉強しようにも集中することができず、ゴロゴロしても鬱憤がたまるばかりだったので、僕は外に出て散歩をすることにした。

魔法学院の周辺には森があり、僕はそこを歩くのが好きだった。

僕は寝転んでいたベッドから起き上がってマントをかけると、机の上に置いておいた杖を手に取って部屋の外へと歩み出した。

そうして寮から出て人気のない森を目指して広場を横切ろうとしていたら、視界の隅に珍しい組み合わせを発見した。

タバサとミスターロレーヌが一緒に歩いていたのだ。

僕は最初にデートの可能性を考えて、瞬きをする間にその考えを打ち消した。

タバサの様子はいつも通り無表情無感動無関心で何の変わりもなかったが、ミスターロレーヌが非常に不機嫌そうに肩を怒らせているのが遠目にも分かったのである。

僕はその二人の後を追って声をかけることにした。

もしも逢い引きだったとしても謝ればすむことだ。

「やあ、こんなところで二人で何をしているんだい？　君たちが一緒にいるなんてなんだか珍しいね」
と僕は訊いた。
「む、君か……。いや、これはちょっとな」
と言葉を濁したのはミスターロレーヌだった。
タバサは相変わらず本に集中しているようで、僕が話しかけてもちらりと視線をよこして軽く頷いただけだった。
「差し支えがなければ僕も混ぜてくれないかな。もしも君たちがこれから二人きりで人に言えないようなことをするつもりなら、さすがに僕も空気を読むんだけれど」
と僕が言うと
「そんなことをするつもりはない！　でも君がきてくれたのはかえってちょうど良かったかもしれないな。ちょっと時間は取れるか？」
とミスターロレーヌは答えた。
「特に予定はないから時間は大丈夫だよ。僕は何をすればいいんだろう」
「君には僕とミスタバサの決闘の立会人を務めてもらいたい。君が立会人なら役者不足ということはないだろう」
僕はミスターロレーヌのお世辞をききながら、頭の中で疑問が浮

かび上がってくるのを止めることができなかった。

僕はそれを素直に訊いてみることにした。

「僕が立会人を務めることに問題はないけど……。一体どうして君たちが決闘しなければならないんだい？」

「僕たちが決闘をすることになった理由はわざわざ君にきかせるほどのものではないよ。簡単に言うなら、ミスタバサは僕の貴族としてのプライドに土を付けた。その償いをしてもらう為の決闘だということだ」

僕にはいまいち理解できない話だった。

プライドを傷つけられたら人は決闘を申し込むものなのだろうか。

相手をぼこぼこにして鬱憤をはらすつもりなのかもしれない。

もしもそんな理由で決闘を行いたいというのなら、さすがにこれは止めるべきだった。

それに、学生同士の決闘は校則で禁止されていたはずだ。

僕が理をもってミスターロレーヌを説得しようと口を開きかけたとき、僕は右手の袖が引っ張られるのを感じた。

僕の袖を引っ張ったのはタバサだった。

どうしたんだろうかと彼女の方を見ると、いつもと変わらない淡々とした口調で

「いい」

と言った。

「いいって、何がいいの？」

と僕は訊いた。

「決闘、する」

「タバサはそれでいいの？」

タバサは顎をわずかにひいて、Ｙｅｓの返事を返した。

「それに、すぐに終わる」

やれやれ。

僕は溜息をはいた。

タバサまでこういうなら仕方がない。

それに今のタバサの最後の一言はミスターロレーヌにもはっきりと聞こえており、彼は熟れたトマトのように顔を真っ赤にさせている。

その顔はまるで入学式でミスヴァリエールが見せたオーク鬼のような表情にそっくりだった。

ここまできてしまったら、止めるのは無理だろう。

「仕方ないな。立会人をつとめよう。では二人とも、準備をしてくれ」

ミスターロレーヌはすでに杖を抜き放って、いつでも戦闘に移れる体制に入っていた。

一方タバサは私に本を預けると、ミスターロレーヌと少し距離を離した場所に相対して、棒のように突っ立っていた。

いかにもやる気のなさそうな佇まいである。

その様子を見て、ミスターロレーヌがますます逆上して歯ぎしりをするのが分かった。

しかしよく見ると、タバサの口がわずかに動いているのに気がつく。

魔法を放つのは合図の後でなくてはならないが、呪文を詠唱するだけならばその前から準備をするのが当たり前。

決闘の常識とも言えるものだった。

ミスターロレーヌはタバサの様子を察知することができていない。

僕はまた、小さく溜息をはいた。

二人のレベルの差は一目瞭然だ。

僕はミスターロレーヌの数秒後の状態を幻視して、心の中で十字を切った。

「二人とも、準備はいいかな？」

二人が頷く。

「勝利条件は相手に降参させるか相手の杖を奪う、もしくは破壊すること。直接怪我を負わせるような攻撃は極力避けるように。また、僕が静止したら二人は攻撃をやめること。例外はないよ。……問題はないかな？」

また二人が頷く。

「それでは……はじめ！」

勝負は残酷なものだ。

誰かと誰かが争えばそこには勝者が生まれ、敗者は涙をのむことになる。

敗者にできることは勝負の結果を悔やみ、反省し、次につなげるべくまた努力を積み重ねていくことだけだ。

勝負は１０秒とかからなかった。

まるで戦いになっていない。

大人と子供の喧嘩のようだった。

勝者は僕に預けていた本を受け取ると、無言でその場を後にした。

敗者は未だに地面に踞って動く様子が見られない。

僕もまた何の言葉もかけることなく、その場を離れたのだった。

その後、タバサに話を聞いてみた。

ミスターロレーヌが絡んできたのは風の授業でタバサが風の魔法をうまく扱うのを見て嫉妬したからだそうだ。

あまりに情けない理由だった為に僕はそれがタバサなりの冗談だと思ってしまったほどだ。

僕は、女子と男子の嫌な部分を一日の後半にたくさん見せられてうんざりしてしまったのだった。

キュルケとタバサ　その１（後書き）

昨日は朝まで飲み明かしていた為に更新することができませんでした。

今週は何かと忙しいので、そういう日もぽつぽつ出てくるかもしれません。

キュルケとタバサ　その2

キュルケの悪口をきいてタバサとミスターロレーヌの決闘を見届けてから1週間、僕はいつもと変わらない生活を送っていた。

朝早くに起きてトレーニングを課し、キュルケの話を聞いて、授業を受けて、タバサと本を交換して。

しかし今日ばかりはいつもと同じというわけにはいかなかった。

何か問題が起こったわけではない。

今日は、舞踏会が行われるのだ。

「思ったよりも随分いい感じじゃない。もう少し派手にしてもいいと思うけど」

とキュルケが僕に言った。

彼女は黒い妖艶なドレスを身にまとっていた。

背中のシルエットがセクシーなロングドレスだ。

胸の露出はいつも通り。

なるほど、確かに彼女の魅力を大いに引き出す効果的なコーディ

ネートだ。

少し目のやり場に困ってしまうが……。

「僕は君と違って地味なのが好きなんだ」

と僕は言った。

「あなたって人にまぎれて普通に生きて普通に死にたいタイプ？没個性なんてつまらないじゃない」

「それは違うよキュルケ。僕は確かに他の人たちと同じように生活して普通に生きている。君やミスターグラモンみたいに派手で露出の多い服を着ることもなければ、タバサのように人々から離れて賢者のような生活を送ることもないし、ミスヴァリエールのように不名誉ではあるけれど有名な二つ名を与えられているわけでもない。でもそれは自己主張をしないということではないし、決して群衆の中に埋もれて生きようということでもない。もちろん没個性なんかでもない。いいかい、それとこれとは問題の質が違うんだ」

「じゃああなたは普通ではあるけれど人と違った工夫をしているってこと？」

「僕だけじゃないよ。みんなそうなんだ。みんなそれなりに努力してそれなりに自分自身と向き合って、たまには羽目を外してふざけて生きているんだ」

「でもそういうのって虚しくない？」

「そうかもしれない。でも多くの人が、そういう生き方しか知らな

いんだ。でもみんなやることはやっているものなんだよ」

キュルケはふうん、と言ってそれきりこの話題に興味をなくしてしまったみたいだった。

彼女にはあまりよく分からないことかもしれない。

キュルケは容姿に優れていて異性に人気があり魔法の腕も冴えていて、ゲルマニアの貴族としてそれなりに不自由なく楽しくやっている。

そういうタイプの人間はちょっと立ち止まって自分の立っている場所を確認するような時間をもっていないものなのだ。

今は脇目も振らずに自分の好きなことに一心不乱に打ち込むのが楽しくて仕方ない時期だろうし、おそらくそれでいい。

それによく考えると、彼女は大人びているとはいえまだ二十歳にも達していないのだった。

前世のことを考えると、僕とキュルケの間にはけっこうなジェネレーションギャップが存在することになる。

それよりも文化の差の方が大きいだろうか。

いずれにしてもキュルケがまだ僕の言うことをうまく理解することができなかったということだけは間違いがなかった。

舞踏会の会場は、人で溢れかえっていた。

中央には広いダンススペースが用意され、いつにも増して豪華で多種多様な料理が部屋の両サイドに並べられている。

多くの生徒たちが楽しそうにダンスを踊ったり珍しい料理を皿に盛ったりして楽しんでいた。

あちこちで女子をダンスに誘わんと奮起する男子の姿がみえ、女子たちは気になる男子からダンスに誘われんといつもより積極的にアピールを送ろうとしているようだった。

キュルケは料理にはほとんど手を付けず、いろんな男子を取っ替え引っ替えしてダンスを踊っていた。

僕もキュルケとは1曲だけ踊った。

僕は断ったのだが無理矢理ダンスホールに連れて行かれて、ダンスを披露するはめになってしまったのだ。

僕はまわりの視線が気になって緊張してしまい、うまくステップを踏むことができずに代わりに何度もキュルケの足を踏みそうになってしまった。

その度にキュルケがうまくリードをして立て直してくれたのがありがたいやら情けないやら複雑な気分である。

それから僕は逃げるようにして人目を避けて会場の隅へと移動し、タバサと時折会話を交わしながら豪勢な料理に舌鼓をうっているの

だった。

「タバサ、はしばみ草はおいしい？」

と僕がきくと、タバサは料理を咀嚼しながら黙って頷いた。

「どうしてはしばみ草が好きになったの？」

と僕がきくと、タバサは首を傾げた。

はしばみ草は生徒たちから人気がない。

栄養価が高いし料理に彩りを添えるのに便利だからこの学院の料理にもよく出てくるのだが、その独特の苦みが舌に合わないという人が多いのである。

僕も初めて口にしたときは、あまりの苦さに思わず顔をしかめてしまった。

それでもはしばみ草が体にいいことはあまりにも有名だったから、僕はいつも我慢して食べていた。

そもそも出された料理を残してしまうという発想が前世からしてあり得ない感覚だ。

よっぽどの理由がない限り、僕は出された料理は完食することに決めているのだった。

そして我慢しながらも何度も食べているうちに、はしばみ草特有の苦みがくせになってくるのである。

だから僕もまたはしばみ草が好きになってしまった。

しかしはしばみ草が最初から好きという人はほとんどきいたことがない。

どう控えめに判断しても、タバサの味覚は普通とは異なっているとしか考えられなかった。

はしばみ草は好きになることはあっても最初から好きであることはまずない。

ビールのようなものだった。

しかしどういう経緯をたどったかもしくは経緯があったかどうかなんてことは、今となってはそう大事な問題ではない。

必要なのは、僕とタバサの二人がそろってはしばみ草がけっこう好きだという情報だけだ。

僕は読書といいはしばみ草といい、タバサとはけっこう趣味が合うような気がしていた。

「僕たちはけっこう気が合うかもね」

と僕は言った。

「？」

タバサは不思議そうな顔をして、さっきよりも大きく首を傾げた。

こうして舞踏会という非日常も何事もなく平和でそれなりに楽しく過ぎていった。

僕もこんな時間がきらいではなかったし随分と満足のいく一日だったと思う。

でもその一方で物足りなさを感じていたのも事実だった。

僕はこの世界が「物語」の世界に通じていることを知っている。

詳しい記憶が抜け落ちているとはいえ、波瀾万丈でドキドキワクワクして、それでも最後はきっとハッピーエンドになるような楽しい「お話」が待っているに違いないと。

だから僕はそういうアクシデントを期待してこの学院にやってきたわけだし、そろそろ何か面白いことが起こってもいいのではないかと考えていた。

でもそれはこの世界のことやここにいる人たちのことを軽んじての考えではなかった。

既に「僕」というイレギュラーがいるし、この世界での出来事に対してテレビの向こうの遠い世界で起こったもののように接するつもりはない。

それでもきっと、一つ世界をまたいでしまえばそこには見たこと

もないようなファンタジックな物語が潜んでいるはずだと知っている??いや確信している??のだった。

でもそれは認識が甘かったのかもしれない。

僕が望んだのは、みんなが楽しく笑いあえるような、そんな愉快な事件だった。

誰かを不快にさせるようなのは断固お断りだ。

だから、目の前でキュルケのドレスが引き裂かれたのをみたときには衝撃を受けてしまった。

幸い傷は負っていないようだったが、大勢の前で堂々と裸にされたのだ。

美しくキュルケの体を覆っていたドレスはぼろぼろになって床に落ちて見るも絶えない状態だ。

これは貴族として……いや人として決して許すことのできない侮辱だった。

僕はダンス相手の男子のローブにくるまれるキュルケの姿を目にしながら、この会場のどこかにいるはずである犯人への怒りにこぶしを握りしめた。

キュルケとタバサ　その２（後書き）

今晩はお酒を飲んできます。

次のお話を今晩書くにしても明日の朝書くにしても、早い時間に更新するのは難しいかもしれません。

キュルケとタバサ　その3

事件が起こったのは僕がちょうど外に出て手洗いをすまし、再び上等な料理とワインを楽しもうと会場に戻ってきたときだった。

会場に入って元いた場所に足を進める最中にキュルケのドレスが引き裂かれてしまった為に、僕には状況確認もままならないような状態だった。

事件に気がついたのは誰かが悲鳴を上げたからだった。

悲鳴はダンスホールの方から聞こえてきた。

何があったのだろうと目を向けてみたら、そこにはドレスを引き裂かれたキュルケがいた。

あまりに突発的な事態であり現場を直接目にしていたわけではなかったので、分かることは限られていた。

とりあえず僕は会場にいたいろんな人たちに聞き込みをしてみた。

「キュルケのドレスを引き裂いたのは魔法だっていうのは本当？」

「それはどこから飛んできたの？」

「その瞬間を目にした？」

「一体誰がこんなことをしたんだろうね？」

しかし犯人を特定できそうな有益な情報に辿り着くことはなかなかできなかった。

分かったことと言えば

「誰かがどこからか何らかの理由で舞踏会の最中に風の魔法でキュルケのドレスを引き裂いた」

ということだけだった。

しかし理由だけは何となく分かるような気がした。

嫉妬だ。

何か根拠があるわけでもないし僕に優れた勘が備わっているというわけでもないけれど、「嫉妬」というものは僕に何らかの引っかかりを感じさせた。

それは一週間前にキュルケの陰口をきいてしまったからかもしれない。

しかしそれを抜きにしても、この学院の女生徒たちのキュルケに対するひがみの感情は強いものだった。

僕がキュルケの為に聞き込みをしている間にもそれは感じられた。

彼女らは言った。

「あんなことになっちゃって本当に気の毒だとは思うけど、ちょっと清々したわ」

「今日の舞踏会も男たちに媚を売ってばかりだったし、ブリミル様の罰が当たったんじゃないかしら」

「いつも惜しげもなく肌を晒しているんだから、別に構わないじゃない」

また僕に忠告をくれるものもいた。

「余計なお世話だろうしこういうことは言わない方がいいかもしれないけど、あまりミスツェルプストーとは付き合わない方がいいわよ」

「友達は選んだ方がいいんじゃない？　あなたまでとばっちりを受けちゃうかもしれないわよ」

僕はこういう言葉を聞くたびにうっすらと微笑んで首を振るのだった。

彼女たちは悪気があっていっているんじゃない。

純粋に僕のことを心配して言ってくれているんだ。

だから僕にできる返事は静かに否定の意を示すことだけだった。

いくら聞き込みをしてもこれ以上の情報は出てこなかった。

僕のこの日の捜査は以上で終わった。

翌日、僕はいつも通りの時間に起きた。

今日からまた授業が始まる。

いつも通りの学院の生活が待っているのだった。

でも、もちろん昨日と今日とは違っている。

僕はのろのろとストレッチをこなしながら自分の脳が半分ベッドに置き去りにされているような気分を感じていた。

自分がいつになくアンバランスで愚鈍な存在になったような気がする。

ひどく不愉快だった。

でも夜明け前の薄暗い学院を抜け出して一心不乱にランニングをすると、いつの間にか脳の半分は戻ってきていて、脳裏にこびりついていた靴の裏のガムのような薄汚い思念もうすれていた。

落ち着いて魔法の練習をすることができる自信がなかったから、その分いつもの倍以上の時間をかけて走っていたのだか、どうやらそのおかげで頭の中が整理されて冷静になれたようだった。

ランニングをすませて部屋で汗を拭きながら改めて昨日のことを考えてみた。

でも犯人を捜すことができる手がかりはどこにも落ちていないように思えた。

事件が起こった後はゆっくりと現場を検証する暇もなかったしそもそも犯行の瞬間を目にしていない。

僕に得られる情報は本当に少ないのだ。

どうして僕がいないタイミングで事件が起こってしまったのだろう。

直接キュルケを見ていなかったにしても、ずっと会場にいればもっと分かることがあったのかもしれないのに……。

僕は間を悪くして手洗いに立ってしまった自らの運の悪さを呪った。

学院は舞踏会の話題で満たされていた。

生徒たちはみな旺盛な野次馬根性を発揮させ、昨日何が起こったのか、一体誰がやったのだろうかということを話し合っていた。

あれだけのことがあったのだから、それも当然と言える。

僕はそれらの噂には耳を貸さずに、キュルケと話をしていた。

キュルケは一見して普段通りの飄々とした態度を崩していなかった。

これは少し僕を安心させたけれど、だからといってキュルケが何も感じていないはずがなかった。

僕は彼女に言った。

「僕は今回のことが許せない。全力で犯人を捜して絶対にそいつを見つけ出してやるつもりだ」

彼女は僕の言葉に少々面食らったようで、珍しく目をまんまるにしてその奇麗な瞳をぱちくりと瞬きさせていた。

そしておもむろに笑い出した。

「あなたって、本当に面白いわね！　でもありがとう。嬉しいわ」

僕も釣られて笑った。

「でもあなただけには任せられないわ。この私に喧嘩を売ったんだもの。どこの誰だか知らないけど、バカで悪戯好きの可哀想な子には罰を受けてもらいましょう」

僕はその日も続けて聞き込みをした。

あまり期待はしていなかったがキュルケに宣言した手前諦めると

いう選択肢は存在しなかったし、僕自身としてもほんの少しでも新しい情報が欲しかったのだ。

しかし誰もが又聞きの下らないうわさ話ばかりを話していて、あまり有効な情報は見当たらなかった。

そしてそのうちに、僕は聞き逃すことのできないうわさ話を耳にした。

「タバサが犯人だ」

というものである。

タバサが入学式でキュルケと一悶着あったことは有名だ。

ミスヴァリエールが散々場をかき乱したが、その前の二人のやり取りも周囲の生徒たちはみな目にしていたのである。

僕は今となってはキュルケとタバサの二人とそれなりに仲良くやっているが、彼女たち自身はあれから何の接点もなくお互いに話す機会ももたないままにこれまで過ごしてきた。

キュルケは暇さえあれば男子を誘惑にいくし、タバサは暇さえあれば本を読んでばかりなので当然の帰結だった。

そしてそれがみんなの目には二人の不和に映ったらしい。

「ミスタバサは入学式での件でミスツェルプストーに恨みがある。だから舞踏会のタイミングを狙ってミスツェルプストーに仕返しを行ったのだ。実際、犯行に使われたのはミスタバサの系統となる風

の魔法であるし、人が密集するダンスホールでうまくキュルケ一人のドレスのみを狙うなんて芸当はそれなりの腕をもっていなければなし得ない。ミスタバサはその条件に合致するじゃないか」

その話はあまりにもっともらしかった。

全ての条件が状況にマッチしている。

また、犯行が行われたのがちょうど僕が席を外していたタイミングだったということもこの話に説得力を持たせた。

タバサと会話をするような生徒は僕しかいなかったからだ。

タバサがちょうど僕がいなくなったタイミングを見計らって犯行を行ったというのだ。

僕がいると邪魔だから……。

僕はこの話にとても混乱した。

僕はタバサがあんな事件を行ったはずがないと確信している。

タバサが犯人であるはずがないのだ。

しかしそれにしてはあまりに話が合いすぎていた。

そして他のみんなも、この話に食いついた。

話の筋が何から何まで通っているのである。

こんなことをきかされた者はみなタバサこそが犯人であると確信することになった。

ミスツェルプストーのドレスを引き裂いた犯人はミスタバサだ……。

ミスタバサには恨みがある……。

そして当然のことながら、この噂はキュルケの耳にも入った。

「ちょっと、ただの噂だと聞き流すには信憑性のありすぎる話が聞こえてきたんだけど、もちろんあなたも知っているわよね」

とキュルケは僕に訊いた。

「知っているよ」

と僕は答えた。

「あなたのお友達のミスタバサが私に恨みをもっていて、それで私に恥をかかせた。この噂は本当なのかしら」

僕は黙っていた。

僕には考えるべきことが多すぎる。

時間が必要だった。

何かがおかしい。

何かが狂っている。

僕の頭の中ではいろんな事象が点として散らばっていた。

考えろ。

点と点は無秩序に点在して個々にその存在を主張していたが、それらは決して無関係なんかではないはずだった。

点と点をつないでいくと、うっすらと浮かび上がってくるものがある。

だがそれは何だ……？

僕の頭の中に浮上したその何かは鮮明な像を結ぶことなく、あいまいな存在を僕に訴え続けるだけだった。

そしてその日、キュルケはタバサに決闘を申し込んだ。

キュルケとタバサ　その３（後書き）

思っていたよりも早くに目覚めたので朝更新することができました。

事件のお話も次でおしまいですね。

キュルケとタバサ　その４

日が沈んで学院がどっぷりと暗闇に溶け込んだ時間に、相対する二つの影があった。

キュルケとタバサだ。

タバサはキュルケの決闘を受け入れたのだ。

決闘の場には二人以外の姿は見られない。

キュルケがタバサに決闘を申し込んだのは人気のない時間を狙ってのものだったから、野次馬が興味本位で覗きにくるようなこともなかった。

「さて、私のドレスを引き裂いてくれたお礼をさせてもらおうかしら。いちおう確認するけど、犯人はあなたなのかしら？」

静かな学園の外で、キュルケの声はよく響いた。

その声には自信と余裕がありありと含まれており、これから先に起こるであろうことに対する不安は一切感じられない。

キュルケは学院でも数少ないトライアングルのメイジであるから、それも当然のことといえた。

例え相手がどんなに優秀でも、まず負けることはない。

そんな自信が透けて見えるようだった。

一方のタバサは沈黙でもってそれに答えた。

「だんまりってわけね。でもどうして私を狙ったりしたのかしら」

沈黙……。

「もしかして殿方たちと楽しくしている私に嫉妬したのかしら。まさか私がよく付き合っている方の中に別れた彼がいたとか意中の人がいたとか、そんなベタな話じゃないわよね」

沈黙……。

「そりゃそうよね。そんな下らない理由で復讐をしようだなんて、貴族がきいて呆れるわ。品性のかけらも感じられないもの。いえどちらかと言うと足りないのは女としての魅力かしら。まあ、あなたがそうじゃないなら構わないのよ」

沈黙……ではなかった。

ぐぬぬ……と歯ぎしりする音と声が漏れる。

しかしそれはもちろんタバサの口から出たものではなかった。

キュルケとタバサの二人が決闘の前に口論を繰り広げている??

喋っているのはキュルケだけだが??のを影から見つめる視線がいくつかあった。

「くっ、ミスツェルプストーの奴、自分のはしたなさを棚に上げて何を好き勝手いっているのかしら……！」

「許せない！　いつもいやらしく男たちに媚を売っているくせに！」

「そうよ！　さっさと始めなさいよ！　そして無様に打ちのめされるといいわ」

闇にまぎれてキュルケとタバサの動静を見守っていたのは、同学年の数人の女子たちだった。

彼女たちはキュルケに対する憎しみを隠しきれない様子で、各々地団駄を踏んだり歯ぎしりをしたりして怒りに顔を歪めていた。

その中で独り、男子生徒が怯えた様子で口を開いた。

「す、少し落ち着きたまえ。そんな風に怒っていてはきれいな顔が台無しじゃないか……」

情けなくも女子生徒たちの発する殺気に震えながら発せられた発言ではあったがそれは女子生徒たちのコンプレックスを見事にカバーしたものであった。

男子生徒の言葉は、むき出しにされていた殺意を収めることになんとか成功した。

彼はほっと息を吐いて自分の置かれた状況を呪いながらも女子た

ちのご機嫌を取るべく言葉を重ねた。

「こうしてあのいけ好かない二人が決闘をしているんだ。どうだい、胸のすく思いだろう。ミスタバサも本を読んでばかりの頭でっかちの割にはバカだよな」

その声は嘲りに満ちていたが、まわりの女子たちは彼の言葉を聞いて気分を良くしたようだった。

「別にあなたが考えたわけじゃないでしょ。ま、偉そうなのも今回ばかりは許してあげるわ。ミスツェルプストーも頭にいくべき栄養が全部あの胸と下品なお尻に詰まっちゃってるんじゃないかしら。こんなにうまくいくなんて、信じられなくて笑いがこらえられないわ」

すると女子たちはそろって愉快そうにくすくすと笑い始めた。

男子生徒もその様子に苦笑しつつも悪い気はしていないようである。

誰も彼もが醜かった。

あまりに醜くて聞くに堪えない会話……。

それは人の神経を逆なでさせるものだった。

そしてここが限界だった。

「そうか、よく分かった」

夜の学院に声が響く。

これは僕の声だ。

でもそれはまるで僕の声ではないみたいに聞こえた。

どこか遠いところから声が響く。

「ど、どうして……？」

誰かがつぶやいた。

「どうしてだって……？」

頭の中が沸騰しそうだった。

それなのに、声だけはどこまでも低くて冷たい。

「それは君たちが答えるべきことなんじゃないのか？」

誰かが息をのむ音が聞こえる。

「恥を知れ！　君たちは貴族だろう。それなのに優美さもなければ慎みも気品もない。どうしてこんな真似ができるんだ！」

しばらくの間、誰も声を発さなかった。

沈黙はいったいどれだけ続いたことだろう。

僕は時間という感覚から切り離されて、うまくそれを捉えることができなくなっていた。

少しの間、あるいはしばらくの間、あるいはかなり長い時間、沈黙が場を支配していた。

みんなうつむいたり気まずそうに視線をさまよわせていた。

それがますます僕を苛立たせた。

「君は……」

口を開いたのはここに唯一居座っていた男子生徒、ミスターロレーヌだった。

「君は、僕たちがやったということを分かっていたのか？」

僕はそれに答えようと口を開きかけたが、返事は別の場所からや

ってきた。

「別に分かっていたわけじゃないわ。もしそうだったらわざわざミスタバサに決闘を申し込む必要もなかったし」

キュルケだった。

キュルケは体にもマントにも傷一つついておらず、その横にはタバサが控えていた。

その様子を見てミスターロレーヌは全ての状況を把握したようだった。

「まんまと一杯食わされたというわけか……」

「その通りだ。僕には犯人が誰かを特定することができなかった。でも推測することはできた。だから撒き餌を用意したのさ。そしてマヌケな犯人が見つかったわけだ」

撒き餌は決闘の情報だった。

僕はこの決闘の情報を事前にミスターロレーヌにだけ流していたのだ。

彼らはそれに引っかかった。

「さて、これ以上君たちと話すべきことは何もない。でも僕だってオーク鬼でもなければ悪魔でもドラキュラでも、ましてやエルフでもない。何か言い訳があるならきこう」

ミスターロレーヌも女子生徒たちもがたがたと震えていた。
でもそれは僕には関係のないことだった。
僕はけっこう根に持つタイプなのだ。
怒りがたまったらその原因をどうにかするしかない。

そして
僕は
犯人グループの者たちに
オシオキをした。

僕はこの時のことをあまりハッキリとは覚えていない。
怒りで頭がいっぱいになっていたからだ。
しかし後からキュルケとタバサに話を聞いたところ、僕の様子は
完全におかしかったらしい。

あれだったら化物に遭遇した方がマシだったろう、とまで言われた。

とにかく今回のことからキュルケに対するあからさまな悪口はあまり聞こえてこなくなった。

少なくとも僕の耳には入ってこない。

一件落着だった。

ただ一つ、僕に不名誉な二つ名がつけられたこと以外には……。

「どうして分かったの？」

とタバサが僕に訊いた。

「あ、それ私も気になるわ。犯人が特定できなかったって言ってもミスターロレーヌは疑っていたんでしょ？　その背後に他の女子たちがいることも。決闘の前口上で挑発的なことを言うように指示を出したのってあなただったし」

とキュルケも顔を寄せて言った。

僕らはいま、僕の自室にいる。

彼らにオシオキを行った後、僕らは舞踏会の口直しと犯人特定の祝杯いうことで簡単な料理とワインを用意して楽しくおしゃべりをしているのだった。

タバサは興味深そうに僕の本棚に視線を投げ掛けていたが、いまは僕の方をじっと見つめている。

僕は説明をすることにした。

「僕は違和感を感じただけだよ」

「違和感？」

キュルケが訊ね、タバサが不思議そうに首を傾げた。

「そう、違和感だ。しばらくしてからタバサが犯人だ、ていう噂が流れたよね。あれは全くのデマだったわけだけど、明らかに様子がおかしかった」

「どういうことかしら」

「辻褄が合いすぎていたんだ。犯行に風の魔法が使われたことも、ちょうど僕が席を外したときに犯行が行われたことも、動機があることも。ないのは証拠くらいのものだった」

「でも普通、それだけそろっていたら犯人だと判断してもよさそうなものだけど」

「種明かしをしてしまうとね、実は僕はタバサが犯人ではないことを知っていたんだ」

「どうして？」

とキュルケは少し驚いたように言った。

「ちょうど僕が会場に戻ってきたときに犯行が行われた。あのとき、僕は真っ先にタバサのところに戻ろうとしたんだ。僕はキュルケのドレスが引き裂かれた瞬間を目にしていない。でもそのときのタバサのことは見ていた。タバサは何もしていなかった。これだけは確かなことだったんだ」

そう、僕は犯行の現場の代わりに容疑者の動きをハッキリ目に捉えていたのだ。

タバサはそのときにもはしばみ草の料理に夢中で、魔法を使った様子は全く見られなかった。

恐らく僕が帰ってくるまでに犯行を完遂できなかったのはミスターロレーヌの失敗だろう。

人が密集して動き回るダンスホールでキュルケのドレスを切り裂くのは容易なことではない。

視線を避ける為にどこかに隠れていたはずだし、キュルケが狙いやすい位置に移動するのと同時に僕が戻ってきてしまったのだ。

「まあ、もしもそれを見ていなかったとしてもタバサを疑ったりはしていなかったさ。タバサが犯人なら僕が帰ってくるよりももっと前に犯行を行っていただろう。タバサならそういうことができる」

キュルケは僕の言葉に納得したようで、しきりに頷いていた。

タバサは不動の体制で僕を見つめたままだ。

僕はタバサに微笑みかけた。

「それに状況は確かにすべて合致していたかのように作られていたけど、一つだけどうも納得のいかないものがあった。それが動機だ。タバサは入学式でされた嫌がらせの腹いせのためにわざわざ動くようなことはしない。ましてやあんな恥知らずなことは絶対にしない。そもそも君たちが入学式以来話さなかったのも嫌悪感があるからじゃなくて機会がなかったからじゃないか。そうだろう？」

二人が頷いた。

「だから黒幕がいると思ったんだ。すると怪しいのはミスターロレーヌだ。彼は先日の決闘の件でタバサに対する逆恨みの感情を膨らませていたであろうことは想像に難くなかった」

「じゃあ彼を呼び出せばよかったじゃない。どうしてこんな回りくどいことをしたのよ？」

「今回の事件は彼が独りで行ったものだとはどうしても思えなかった。彼は小心者で臆病だからだ。自分一人でこんなことを思いついて実行する度胸なんてありはしない。それに彼はキュルケには恨みをもっていなかったはずだ。だからまだ後ろに誰かがいると思ったんだ。でも僕にはそれが誰だか分からなかった。恐らくキュルケに嫉妬している人物であろうということは分かったがそれだけだ。もしミスターロレーヌを脅して口を割らせても、そいつらはしらばっくれるかもしれない。全てはミスターロレーヌの妄言だと……。僕

はそこで行き詰まってしまった。でも見逃すことはあり得なかった。僕は卑怯なやり方で友達を傷つけた奴に一人残らず罰を与えたかったからね」

僕はそこで一旦言葉を区切ってワインをあおった。

「だから、二人に決闘をしてもらうことにしたんだ。あんな卑劣な犯行を行うような奴らだからね、その情報を流せば必ず覗きにくると思ったんだ。そして御覧の有様というわけだよ」

キュルケもタバサもしばらく黙っていた。

二人ともぽかんとして僕を見つめている。

僕は自分が喋りすぎてしまったことを後悔した。

「すまない、ちょっと酔ってしまったようだ。少し頭を冷やして……」

「凄いわ！」

僕の言い訳はしかしキュルケの喚声に打ち消された。

「よくそんなところまで考えられたわね！　あなたがそんなに頭の回転が速かったなんて知らなかったわ！」

とキュルケが目を輝かせて言った。

僕は急に気恥ずかしくなってしまった。

「へ理屈をこねてあれこれ考えるくらいしか能がないからね」
「そんなことはない」
それは小さな声だったが、はっきりと聞こえてきた。
「タバサ？」
「あなたには感謝している。疑いを晴らしてくれてありがとう」
タバサはそういうと頭を下げた。
「そして信頼してくれてありがとう」

この日は三人で遅くまでワインを飲んで話をした。
ほとんどキュルケが喋って僕が相づちをうっていたけれど、タバサも訊ねられれば答えてくれた。
とても楽しい夜だった。
翌日僕は二日酔いになり、この学院に来て初めての遅刻をした。

キュルケとタバサ　その４（後書き）

さて、ようやく事件も終り。
次はどうしましょう。

ところで明日は一泊二日の合宿にいくので更新できないかもしれません。
とあらかじめ言っておきます。

僕とミスヴァリエール

春が去って夏がやってきた。

ハルケギニアの夏は短い。

いつの間にか夏になって太陽はじりじりと僕たちの肌を焼き、そしてすぐに秋が訪れる。

僕はよくタバサと一緒に日射しから逃げるように木陰に入って本を読んだり、キュルケに付き合って草原に寝転がって日光浴をしたりした。

ちぐはぐな行動だったが、まだら模様になったり変な線が入っていたりするようなちぐはぐな日焼けの仕方はしなかった。

体は全体的に健康的な小麦色に焼け上がっていた。

いい塩梅だ。

その日、僕は退屈な授業を受けながらミスヴァリエールのことを考えていた。

僕はキュルケとタバサの二人と仲良くなることができた。

友達だと言ってもいいだろう。

でも僕はいまいちミスヴァリエールとの接点を見つけることができないでいた。

できれば彼女とも友達になりたいと思う。

彼女は何といってもヒロインなのだ。

今はまだ彼女を中心としてハルケギニア大陸が巻き込まれる何かが起こるというような前兆は感じられないけれど、きっといつかはそうなるはずなのだ。

そしてそれが起こるときに、僕もその近くにいたいと思った。

次から次に襲いかかる苦難に共に立ち向かい、時には心を折られそうになりながらも励ましあって、努力と友情の果てに勝利という栄光を手にするのだ。

別に僕は何かに打ち勝ちたいだとか権力や金を手に入れたいと思っているわけではない。

主人公になりたいわけでもない。

でもそういうお話の中に脇役ではなく主要人物の一人として参加してみたいのだ。

だってせっかくの二度目の人生なのだ。

何の因果か多少の知識？？本当にほんの少しだが？？をもった世

界に生まれ落ちてしまったのだ。

少しでも楽しみたいし、何よりも平凡な人生は嫌だった。

普通の貴族として生まれて普通に魔法を教わって普通に礼儀作法を習い、普通に結婚をして普通に子育てをして普通に死ぬ。

そのことを考えると僕はぞっとするような寒気に襲われた。

僕にだって舞台の上に立つ資格くらいはあるはずだった。

運命が敵に回らない限りそれに必要なのはあくまで己の意思のみである。

だから僕は自らの意思で自らの足を踏み出すのだ。

「やあ、ミスヴァリエール。ご飯を食べるのが早いんだね」

僕はとりあえず話しかけてみることにした。

人間はよく見るものに対して自然と愛着がわくものだ。

たとえ一度も話したことがなかったとしても毎日顔を合わせていたら自然と心は近づいていくのである。

嫌なたとえだが、もしも不細工な顔でもいつも見ているとそのう

ちに嫌悪感は薄れ、いつのまにかきらいじゃないとすら思えるようになる。

だから僕はまずミスヴァリエールに認識されることから始めようと思ったのだ。

その辺の雑草と同じような感覚で見られていたのでは、いくら顔を見てもらったところで意味はない。

僕を僕として認識してもらう。

キュルケでもタバサでもなくその他大勢でもない、ちゃんと固有の顔と声と性格をもった一個体であることを理解してもらうのだ。

ミスヴァリエールはいつも食事を早めに切り上げてさっさと自室に戻ってしまう為、僕も急いで後を追ったのだった。

案の定、ミスヴァリエールは僕のことをどこにでもいる通行人Aのように認識していたようだった。

彼女はいきなり話しかけられたことにまず驚き、そしてすぐに不機嫌そうな顔になった。

「あんた誰」

彼女は命令することが体に染み付いている人間のもつ特徴を有していた。

背筋を定規を当てたみたいにすらっと伸ばしてきちんと顎をひいて喋った。

そこには何かしら威厳のようなものが感じられた。

「同学年なのに知らないなんて酷いね。君にとってはキュルケの友達だと言った方が分かりやすいかな」

と僕は言った。

「ああ、あんたが変わり者の……。ツェルプストーなんかの取り巻きと話すことなんてないわ。どっかに行きなさい」

あまり嬉しいことではないのだけれどキュルケは友達が少ないので彼女と仲良くしている僕はみんなに変わり者であると称されることが多かった。

ミスヴァリエールは話しながらキュルケのことを思い出したのか、話しかけたときよりもますます不快そうなオーラを出していた。

「取り巻きだなんて言わないでほしいな。僕はキュルケとは自分の意志で仲良くなって対等に付き合っているんだ。それに今回のことに彼女は関係がないよ。君にとって分かりやすいかと思って名前を出しただけさ」

「じゃあ私に何の用なの。言っとくけど私はツェルプストーと違って暇じゃないんだからね」

やれやれ取りつく島もないな、と思って僕は苦笑した。

最初はマイナスイメージであってもとにかく印象付けなければいけないと思ってキュルケの名前を出したのだけれど、それはもしかしたら悪手かもしれなかった。

こうまであからさまにつんけんとした態度を取られてしまうとどうしたらいいか分からなくなってしまう。

しかし話しかけてしまったのだから仕方ない。

こぼした水は盆に戻すことはできないのだ。

とはいえどうしようか。

世間話ができるような雰囲気でもないし僕とミスヴァリエールがもつ共通の話題なんて簡単には見つけることができなそうだった。

そもそも僕は会話をすることがそんなに得意なわけではないのだ。

「君と友達になりたいんだ」

結局僕は正直に話してみることにした。

ちょっと気恥ずかしいものがあるけど別に告白をしているわけではないのだ。

生徒のAさんが同学年のBさんに友達になりたいという。

どこもおかしなところはない。

でもそう思ったのは僕だけだったようだ。

ミスヴァリエールは少し驚いたようだったけれど不機嫌な雰囲気だけは維持したままに不機嫌そうな声で不機嫌そうに返事をした。

「なんで私と友達になりたいのよ」

「友達になるのに理由が必要かい？」

と僕は聞き返してみた。

「今は必要よ。それまで接点がなくて話したこともない奴が特に理由も目的もなくいきなり声をかけてきて友達になりたいだなんて狂っているじゃない。グラモンが女の子に告白するときだってもうちょっとまともに理由をつけるはずだわ」

確かにミスヴァリエールの言う通りだった。

でも僕はこればかりは正直に話すことはできなかった。

僕がミスヴァリエールと友達になりたい理由を説明する為には前世のことから話す必要があるが、どう考えてもそんなことができるはずがないのだ。

正直なことを話せばよくて頭のおかしな変人扱いをされ、悪ければ教会に通報されて異端の扱いを受けてしまう。

僕は嘘をつくことが苦手だったしきらいだったから、核心の部分を突かれるといつにも増して口数が少なくなってしまうのだった。

「ごめん、やっぱり何でもない」と言って退散することも考えたが、それはどこからどう見ても妙手とは言い難い対応だった。

どうしよう。

僕から話しかけたのだ、僕が話さなくてはいけない。

賽は投げられたのだ……いや、こういうことはさっきも考えたな。

今は話すことを考えるんだ。

でも何を……？

思い出せ……僕とミスヴァリエールには共通点があったじゃないか……！

こんな簡単なことを忘れていたなんて。

「そうだ！　ミスヴァリエールは魔法が苦手だったね。どうだろう、よかったら一緒に練習してみない？　僕なら少しは教えてあげることができ？？」

「け、け、け……」

「毛？　家？　怪？」

「……結構よ！　用事はそれだけね。さようなら。もう話しかけないでちょうだい！」

僕とミスヴァリエールが共有できるような話題は魔法くらいのものだった。

少なくとも、僕がすぐに思いつくものとしては。

でも、僕はミスヴァリエールが魔法に対してコンプレックスを抱いていることを知っていたはずだった。

だって学院の生徒なら誰でも知っていることだ。

だから僕はその話題を選ぶべきではなかったのだ。

僕のミスヴァリエールへのファーストコンタクトはどうやら失敗したらしかった。

彼女は明らかに気分を害した様子でまるで床をへこませんとするようにどしどしと足音を立てて去っていってしまった。

怒らせてしまったことは残念だったが、よく考えてみれば爆発さ

せられなかっただけマシだったのかも知れなかった。

とにかく、今回はダメだったのだ。

でも僕は諦めなかった。

キュルケがいないときに食事に誘ったり??彼女はしばしば男といちゃいちゃするのに忙しくて時間を忘れたりご飯を忘れたりすることもあったのだ??授業のことで相談したりおすすめの本を紹介したり街への買い物やお茶に誘ったりした。

そしてそのことごとくが断られ、僕の努力は踏みにじられる結果となった。

僕が彼女に話しかけて彼女が嫌そうな顔をして、僕が彼女を誘って彼女が不快そうににべもなく断る。

それもまた、僕の日常の一コマに加えられることとなった。

僕とミスヴァリエール（後書き）

投稿が遅れてしまいました。

昨日は疲れ果てて寝てしまったので。

そして今日は書いている途中に文章がぶっ飛びました。

そんなに長い文章を書いているわけではないので被害というほどのものでもないのかもしれませんが、前に書いたものを再び書くという行為は精神をすり減らすものですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4361s/

ハルケギニアで溜息

2011年4月26日06時42分発行